

川越市連雀町周辺地域を対象とした地域活性化ワークショップ

著者	小瀬 博之, 尾崎 晴男, 齋藤 伊久太郎
雑誌名	地域活性化研究所報
号	12
ページ	25-29
発行年	2015-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007417/



川越市連雀町周辺地域を対象とした地域活性化ワークショップ

実施担当研究員：小瀬 博之（総合情報学部総合情報学科 教授）

尾崎 晴男（総合情報学部総合情報学科 教授）

齋藤伊久太郎（客員研究員）

開催日時：平成 26 年 9 月 28 日（日曜日）10:00～16:15

場 所：川越市内（連雀町周辺地域）

対 象：川越市民ほか

参 加 者：15 人（うち市民 2 人、日本アメニティ研究所 4 人、学生 6 人、教員 3 人）

参 加 費：無料

1.事業の背景と目的

川越市の中心市街地は、蔵造りの町並みで知られる伝統的建造物群保存地区をはじめとした観光地域と川越駅・本川越駅・川越市駅前周辺を中心とした繁華街の 2 つの顔を持つ。その双方の地域に挟まれた地域に連雀町周辺地域がある。地方都市の中心商店街の衰退化が言われて久しく、この地域にある商店街も同様にその活性化が急務である。観光地区と繁華街に挟まれたこの地域の中心にある、川越名店街と中央通り二丁目商店会では、「川越中央通り「昭和の街」を楽しく賑やかなまちにする会」を結成し、昭和初期から残る建物の保存や昭和のあたたかみのある商店街の再生をめざし、「昭和の街」としてのまちづくりを進めている。

本事業計画は、こうした地域の活動も踏まえ、これに寄与するための基礎的な資料づくりを目的とした。その最初の活動として、連雀町周辺地域を対象に①地域の魅力や課題を地図にまとめる調査を実施し、②得られた知見をまとめ、今後の方向性を検討するディスカッションを行うワークショップを実施した。

2.事業の実施内容

2.1 予備調査

事業を実施する対象地の確定や、調査ルートを選定するために、予備調査を行った（表 1）。予備調査に先立ち、商店街の活性化には、商店街を包含するある程度のボリュームを持った地域から知見を得る必要があるという考えのもとに、調査対象地域を設定した。まず、「昭和の街」の北端である仲町交差点、南端である連雀町交差点を中心軸とした。この軸を中心に南東端を松江町交差点、南西端を六軒町交差点に設定し、北の軸を仲町商店街の東西の通りに設定し、これらに囲まれた範囲を調査対象地域とした。8 月 6 日の予備調査では、設定した調査対象地域の確認と、調査における歩行ルートの選定を行った。9 月 22 日の予備調査では、8 月 6 日で得られた知

表 1 予備調査の概要

日時	平成 26 年 8 月 6 日（水）15:30～17:30	平成 26 年 9 月 22 日（月）11:30～18:00
場所	川越市連雀町周辺地域	
内容	ワークショップにおける調査対象地の確認と、調査における歩行ルートの選定を行った。	8 月 6 日に行った予備調査の結果を踏まえ、改めてまち歩きを実施し、ワークショップにおける調査の歩行ルートを確定した。

見を精査した上で改めてまち歩きを行い、若干の変更を行った上で、歩行ルートを確定した。

2.2 ワークショップの概要

ワークショップの概要を表2に示す。9月28日10:00に本川越駅に集合した参加者は15名である。内訳は、市民2人、NPO法人日本アメニティ研究所の会員4人、東洋大学の学生6人、東洋大学の教員3人である。ここで2班に分かれて同じルートを辿りながら調査を行った。参加者らは調査の最中、配布されたA3版の白地図に「昭和を感じる場所、建物、要素など」、「アメニティ（快適な環境）を感じた場所」、「ディスアメニティ（不快な環境）を感じた場所」を地図に記入しながら歩行した。12:00に蓮馨寺に到着し昼食の後、13:00から地図を作成した。歩行の際に地図に記入した内容を、A1サイズ16枚分の「ガリバーマップ」に反映させる作業を行った。休憩の後14:30からは、それぞれの班で、個々人が「ガリバーマップ」に反映させた内容や、歩行して得られた知見をもとに、ディスカッションを行った。それぞれの班で得られたディスカッションの結果を15:30から発表し、16:15に閉会した。

表2 ワークショップの概要

日時	平成26年9月28日（日）9:00～16:15
場所	川越市連雀町周辺地域
参加者	参加者数 市民2人、日本アメニティ研究所4人、学生6人、教員3人の計15人 グループ 2班に分かれて、同じルートを歩行
参加者評価	歩行中に「昭和を感じる場所、建物、要素など」、「アメニティ（快適な環境）を感じた場所」、「ディスアメニティ（不快な環境）を感じた場所」を地図に記入
日程	10:00 西武新宿線本川越駅前広場集合 10:00～12:00 2班に分かれて決められたルートを調査 12:00 蓮馨寺到着 13:00～14:20 地図の作成（蓮馨寺講堂） 14:30～15:35 まとめとディスカッション 15:30～16:10 ディスカッション内容の発表・総評 16:15 閉会

2.3 調査

参加者らは、本川越駅から連雀町交差点まで徒歩で移動し、そこから調査を開始した（写真1・2）。調査は、まず、連雀町交差点から仲町交差点まで歩行し、そこから西へ移動、最初の角を南へ向かった。次の角を西へ向かうと、じっくり調査をしていた第1班は、当初の予定を繰り上げ、その次の角を南へ向かい、更に次の交差点を東に向かい、連雀町交差点をめざした。第2班は予定通り次の角を北へ向かい、仲町交差点のある通りを西へ向かった。最初の交差点を南へ向かい、さらに最初の角を東へ向かった。突き当たりを南へ向かうと、次の角を西へ向かい六軒町交差点をめざした。六軒町交差点からは、連雀町交差点をめざした。連雀町交差点からは、熊野神社をめざし、その境内を通過し、大正浪漫夢通りに出た。これを北上し立門前通りに出ると東へ向かった。突き当たりの通りを北へ向かい、次の角を西へ向かった。中央通りを越えた最初の角を南へ向かい、蓮馨寺の境内で調査を終えた。ルートを後述する図1の「アメニティマップ」に示す。

2.4 地図の作成

歩行前に配布されたA3版の白地図に記した「昭和を感じる場所、建物、要素など」、「アメニ

ティ（快適な環境）を感じた場所」、「ディスアムニティ（不快な環境）を感じた場所」をもとに、参加者らは、「ガリバーマップ」に3色のフラグを布置していった。「昭和を感じる場所、建物、要素など」に関するものは黄色のフラグ、「アムニティ（快適な環境）を感じた場所」に関するものは緑色のフラグ、「ディスアムニティ（不快な環境）を感じた場所」に関するものは赤色のフラグに、場所や判断要因を記述した（写真3）。



写真1 「昭和の街」での調査の様子



写真2 大正浪漫夢通り～中央通り間の調査の様子



写真3 「ガリバーマップ」に布置されたフラグ

2.5 ディスカッション

「ガリバーマップ」に布置されたフラグを見ながら、それぞれの班でディスカッションを行った。

第1班では、「昭和っぽさ」、「魅力」、「課題」に分けてそれぞれキーワードを抽出した。その結果、「木造レンガ」や「トタン」、「看板建築」、「道ばたの小物」などが「昭和っぽさ」として挙げられていた。「魅力」については、「昭和以前の建物に多く出会える」、「バス停のデザイン」、「駐車場と自動販売機が街と合うように設計されている」などが挙げられていた。「課題」については、「低層の建物の中に高層マンションが見えてしまう」、「明らかに使われてない建物の整理」、「アーケードのシャッターをどうにかする」などが挙げられた。

第2班では、「昭和の街」が良かった。自然に古いものが残っている、「昭和っぽさが散らばっていた裏通りの魅力」、「アーケードと昭和っぽさに関連がありそう」、「空き家が使われていないのがもったいない」、「蓮馨寺の空間は街の広場になっている」、「高層マンションがよくない」などの意見が挙げられた。

3. フラグの分析

「ガリバーマップ」に布置されたフラグをデータ化し、3つの要素を記号と色で区別して付置した「アムニティマップ」にまとめ、分析を行った（図1）。布置されたフラグは中央通りに集中している。全体では、150か所から265枚のフラグが得られた。得られたフラグのうち、122枚（46.0%）が「昭和を感じる場所、建物、要素など」、92枚（34.7%）が「アムニティ（快適な環境）を感じた場所」、51枚（19.2%）が「ディスアムニティ（不快な環境）を感じた場所」だった。つまり、参加者らは、「昭和を感じる場所、建物、要素など」を最も多く抽出した。さらに、「熊野神社」に12枚（黄3枚、緑6枚、赤3枚）と最も多くのフラグが集まった（写真4）。次いで、「studio1925」に10枚（黄6枚、緑4枚）（写真5）、「県道15号線沿いのアーケードとシャッターが閉まった店舗」に10枚（黄5枚、赤5枚）（写真6）のフラグが集まった。「昭和を感じる場所、建物、要素など」を記した黄の旗が最も多く集まった場所は、「中央通り二丁目商店会西側のアーケード」（黄6枚、赤3枚）（写真7）と「studio1925」（既出）であった。次いで「お

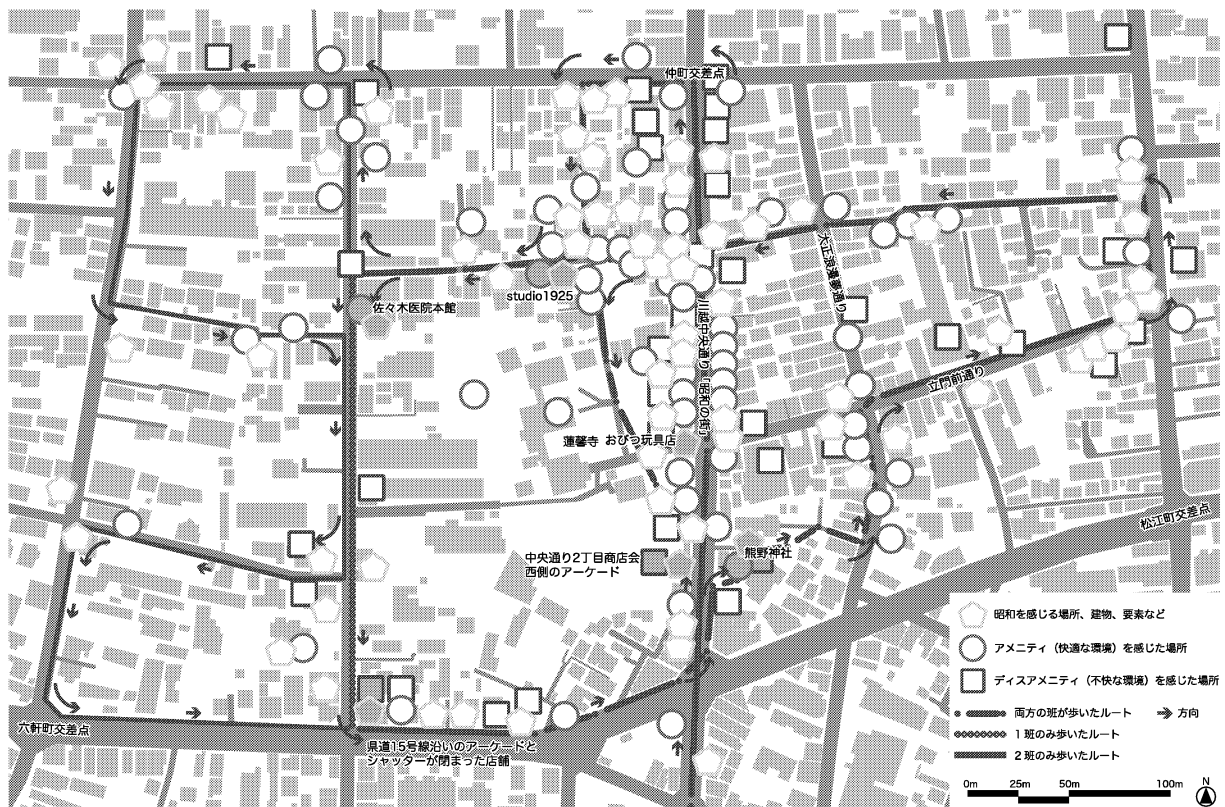


図1 3つの要素を記号と色で区別して付置した「アメニティマップ」



写真4 熊野神社

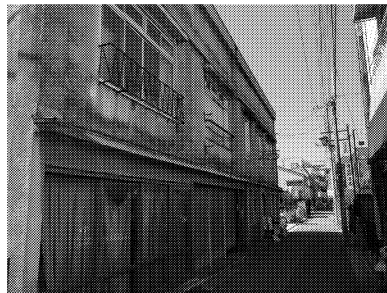


写真5 studio1925



写真6 県道15号線沿いのアーケードとシャッターが閉まった店舗



写真7 中央通り2丁目商店会西側のアーケード



写真8 おびつ玩具店

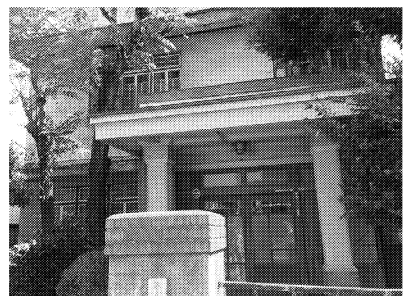


写真9 佐々木医院本館

びつ玩具店」(黄5枚)(写真8)、「県道15号線沿いのアーケードとシャッターが閉まった店舗」(既出)、さらに「佐々木医院本館」(黄4枚、緑1枚)(写真9)であった。

これらに着目してみると、「studio1925」は古道具・アンティークとカフェレストランの店になっており、建物は大正14年(1925年)に建てられた。「昭和を感じる場所、建物、要素など」に

については、外観や飾られている物が対象になっているのに対し、「アメニティ（快適な環境）を感じた場所」としては、カフェレストランに対し、「おいしそう」などのコメントが得られた。その他の場所で、「アメニティ（快適な環境）を感じた場所」としてコメントが得られたのは、「佐々木医院本館」であるが、外観に関するものであり、昭和のイメージを肯定するコメントとなっている。「おびつ玩具店」については「昭和を感じる場所、建物、要素など」に関するコメントのみ指摘されている。「中央通り 2 丁目商店会西側のアーケード」、「県道 15 号線沿いのアーケードとシャッターが閉まった店舗」では、「ディスアメニティ（不快な環境）を感じた場所」に関するコメントが得られた。その内容は、前者は歩道の狭さが指摘されているのに対し、後者は閉められたシャッターが指摘されている。いずれもアーケードなどの外観は、「昭和を感じる場所、建物、要素など」として比較的多く認識されているため、得られた課題を克服することによって、魅力的な場所に変化する可能性を示している。

4.まとめと今後の展望

本事業計画では、15 人の参加者とともに、川越市連雀町周辺地域において、「昭和を感じる場所、建物、要素など」、「アメニティ（快適な環境）を感じた場所」、「ディスアメニティ（不快な環境）を感じた場所」を抽出した。それらの多くは、中央通りに集中する傾向にある。しかし、それ以外の場所でも抽出されていることから、「昭和」の保存、保全には、地域的な視野に基づく展開が望ましいと考える。また、「昭和を感じる場所、建物、要素など」については、建物や構造物の外観で判断する傾向にあり、それが厳密に昭和時代に建てられたものでなくても「昭和を感じる」と判断していることがわかった。

今後は、「昭和を感じる場所、建物、要素など」についてさらに分析していくことに加え、「アメニティ（快適な環境）を感じた場所」、「ディスアメニティ（不快な環境）を感じた場所」との関連性についても検討することによって、「昭和の街」としてのまちづくりを進める対象地域とその周辺の活性化に寄与するよりよい資料を作成していきたい。また、今回得られた「昭和を感じる場所、建物、要素など」、「アメニティ（快適な環境）を感じた場所」、「ディスアメニティ（不快な環境）を感じた場所」に対するより客観的な見解を得るべく、イベントやワークショップを実施し、知見を深めていきたい。